

石川県埋蔵文化財情報

第 16 号

巻頭写真（古府・国分遺跡、七尾城跡、大川遺跡）

平成 17 年度県内発掘調査をふりかえって..... 所長 谷内尾晋司..(1)

発掘調査略報

粟津小学校遺跡(6)

飯田町遺跡(8)

渡合遺跡(9)

飯川谷製鉄遺跡(10)

東三階 A 遺跡(12)

七尾城跡(14)

花園上田遺跡(16)

古府・国分遺跡(17)

下町マツチャマ遺跡(21)

大槻ブンゾ遺跡・大槻キツチャマエダ遺跡・大槻ヤマソ遺跡・春木マエダ遺跡(22)

米浜遺跡(24)

良川北遺跡(25)

瀬戸町遺跡(26)

鉢伏カクチ遺跡(27)

加茂遺跡(28)

下福増遺跡(30)

白江梯川遺跡(31)

大川遺跡(32)

平成 17 (2005) 年度下半期の遺物整理作業 企画部整理課..(34)

調査報告

金沢市畝田西および畝田東遺跡群出土木簡の保存処理 中山 由美..(39)

2006年 9 月

財団法人 石川県埋蔵文化財センター

古府・国分遺跡

写真1 B地区掘立柱建物群

B地区中央から西側に位置する掘立柱建物群である。写真右側(東)に大型建物(12m + 1.1m × 5.7m + 2.5m)があり、数回の建替えが想定される。左側(西)に少し距離を置いて、主軸が若干異なる建物群が存在する。

写真2 B地区 SE02(井戸)

角柱を井桁に組合せた土台を造り、同じ角柱を隅柱として柱の2面に切り込みを入れて横板を落とし込んだ井戸枠を持つ。掘り方上面には東西に木樋があり、東側は底板が無く、西側には底板があり、共に中心に向かって低くなっている。井戸枠内からは須恵器、6本の斎串、木製形代、獣骨片が出土した。



写真1 B地区掘立柱建物群



写真2 B地区 SE02 (井戸)

七尾城跡

写真 1 遺跡遠景（東から）

写真の左方向に本丸が位置する。手前にある古屋敷大池の山側の岸が総構えの推定線である。

写真 2 金を溶かした坩堝

出土した坩堝数十点のうち、3点に金の付着が確認された。純度約80%の金が付着しており、金の生産加工に使用されたものと考えられる。



写真1 遺跡遠景（東から）



写真2 金を溶かした坩堝

大川遺跡

写真1 調査区と現在の町並み（上空東から）

大川遺跡は近世城下町の一部であり、梯川左岸に位置する。調査では町屋や堀、堀の護岸用の石垣などを検出した。町屋は道路に面して東西に長い短冊状の形態を呈しており、現在の町並みも、この区画割りの影響を受けている様子がうかがえる。

写真2 検出された石垣（南東から）

石垣は南北方向に向かって検出された。長方形の凝灰岩を積み重ね、最大で5段が残存していた。石垣の南側は後世の破壊を受けて残存していなかったが、北側は梯川方向へ延びていく様子が確認された。



写真1 調査区と現在の町並み（上空東から）



写真2 検出された石垣（南東から）

平成17年度県内発掘調査をふりかえって

所長 谷内尾晋司

平成17年度は、県内全体で75件、約128,000㎡の調査(県37件、約58,300㎡、市町村37件、約66,000㎡、金沢大学1件、3,767㎡)が実施されました。開発事業に伴う緊急調査が70件、能美市の秋常山古墳群など史跡整備に伴う調査5件となっております。地域別で見ますと、奥能登(珠洲市、輪島市、鳳珠郡)7件、中能登(七尾市、羽咋市、鹿島郡、羽咋郡)25件、北加賀(金沢市、かほく市、河北郡)24件、南加賀(小松市、加賀市、白山市、能美市、石川郡、江沼郡)19件となっております。件数的には能越自動車道に伴う七尾城跡の調査など、七尾市周辺での調査が多く、面積的には、野々市町が区画整理事業に伴う調査で約23,000㎡を実施するなど、金沢近郊の地域が多く、時代別では、古代(奈良・平安時代)の遺跡が49件と多くとなっております。

では、主なものについて、時代別に簡単にその概要を紹介いたします。

縄文時代の遺跡の調査は近年少なく、史跡整備に伴う真脇遺跡を含め4遺跡にすぎませんでした。七尾市の国分尼塚遺跡で、県内では発見例のあまりない、前期前半の住居跡2棟が検出されました。土を掘り込んだ略円形の径2m内外の小さなものですが貴重な発見例となりました。

弥生時代では、七尾市国分尼塚遺跡など19遺跡が調査され、かほく市鉢伏カクチ遺跡、野々市町徳用クヤダ遺跡、白山市横江庄遺跡などで竪穴住居跡などが発見されています。

金沢市薬師堂遺跡では、弥生後期の1辺16mを測る大型のものも含む方形周溝墓群と組合式木棺の棺材(底板、側板)を残す木棺墓が検出されました。墓域や集落域を区画すると考えられる大溝から、大量の土器とともに鳥形・戈形木製品、琴、鋳未成品など多くの木製品が出土しました。遺跡の一端が調査されたにすぎませんが、首長祭祀を伴う地域の中核的な集落と考えられます。また、小松市白江梯川遺跡から弥生時代のものとしては出土事例の少ない銅鏃1点が出土しました。



薬師堂遺跡の木棺墓

古墳時代では、珠洲市粟津小学校遺跡など25遺跡が調査され、七尾市栄町遺跡、金沢市の無量寺C遺跡、出雲じいさまだ遺跡など掘立柱建物跡からなる集落跡が調査されております。

出雲じいさまだ遺跡では、多数の緑色凝灰岩片とともに管玉の未製品、メノウ製の勾玉などが出土しました。また、小松市薬師遺跡では朝鮮半島系とされるL字型の竈を持つ竪穴住居跡が検出され、七尾市東三階遺跡から腕輪形石製品の一種である車輪石未成品の破片が出土しました。能美市秋常山古墳群では、県内最大の前方後円墳である1号墳に整備事業が、今年から本格的に開始されました。

古代(奈良・平安時代)では、49遺跡が調査され、野々市町三日市A遺跡、七尾市古府・国分遺跡、津幡町加茂遺跡などで大型の掘立柱建物跡が検出されました。

古代北陸道の道路跡が発見された三日市A遺跡では、道路跡からやや離れた地点からほぼ方位軸を合わせた8間×2間の長大な建物を含む掘立柱建物跡群が検出されており、古代北陸道との関連性



三日市 A 遺跡の大型建物

河北縦断道建設に伴い新たに調査を開始いたしました。これらの調査で、加茂遺跡は宗教施設（加茂麿寺跡）を含む関係施設群からなるかなり大規模な遺跡であることが明らかにされつつあり、センターの調査では、平安前期の溝から、漆が付着した筆、木工具のヤリガンナ、ふいごなどの鍛冶用具が出土し、生活物資を生産する工房関係の施設が存在した可能性も出てまいりました。白山市相木ナカニシ遺跡は、小型の掘立柱で造られた建物跡と竪穴住居跡からなる遺跡で、手取扇状地の乾田開発にあたったと思われる奈良時代から平安時代前期の農民集落の貴重な調査例となりました。また、古代土器製塩関係遺跡では、七尾市花園上田遺跡、志賀町米浜遺跡が、窯業関係では小松市豆岡向山窯跡が調査されました。

中世では、珠洲市飯田町遺跡、白山市二曲城跡など32遺跡が調査されました。

七尾城跡では、その城下町を横断するかたちで能越自動車道が計画決定されたのに伴い、橋脚の設置位地等を定めるための事前の確認調査が開始されました。城の総構え堀推定地に隣接した通称「鍛冶島」地区では、多量の焼土と共に韃の羽口、鉄滓、坩堝など鍛冶や鋳物に関連する遺物が多数出土しました。坩堝のなかには金を溶かしたものも含まれ、さらに金箔を施した鎧の一部や刀装具が出土していることから、鍛冶・鋳物師や武具など製作に関わる職人達の活動の場であったと考えられ、七尾城下の構造を解明する上で貴重な成果となりました。また、野々市町の富樫館跡、徳用クヤダ遺跡では、中世の武士の館に関係すると思われる堀跡や建物跡などが検出されました。特に平地にある中世の城館跡については、耕地整理などで壊され、よく姿がわからなくなっている場合が多いので、貴重な調査成果となりそうです。中能登町の石動山では、昨年引き続き講堂跡の横にある清水屋敷跡と伝えられているところが発掘調査され、室町時代の大型建物の礎石と石敷き通路跡が発見されました。石動山では南北朝内乱で全山が焼失し、その後復興が進められ、15世紀初めに主要伽藍の復興が完成し、本山の山城勤修寺から導師をむかえ、「上大宮坊」で盛大な記念式典が行われたと記録にあり、今回発見された遺構がその形態や年代観から「上大宮坊」跡の可能性が考えられ、中世の石動山の姿の一端を示す遺構として注

が注目されます。また、古府・国分遺跡は、能登国分寺跡に隣接しており、地方では発見例が少ない特異な構造をもつ「方形横板組井戸枠」を納めた平安前期の大型の井戸跡が検出されました。なお、国道七尾バイパスや能越自動車道が能登国府推定地やその周辺を貫通する計画と聞いており、今後この近辺の発掘調査がにぎやかになりそうです。また、加賀郡勝示札が出土したことで知られる加茂遺跡では、津幡町が史跡指定に向けての範囲の確認調査を実施しており、県のセンターでは



相木ナカニシ遺跡の竪穴住居跡

目されます。輪島市門前町飯川谷製鉄遺跡では、製鉄炉跡とそれに関係すると考えられる炭窯跡、掘立建物跡が調査され、高爪山の山麓に数多く分布する製鉄遺跡の実態解明に新たな見地を得ることができました。

近世（江戸時代）では、金沢城跡、戸室の石切丁場跡をはじめ金沢城下の西外惣構跡、兼六元町遺跡、宝町遺跡、さらに小松城下の大川遺跡など、19遺跡が調査されました。金沢城跡では、本丸跡が調査され、三階櫓台石垣を確認するとともに、本丸と本丸附段を区画する堀や石垣が新たに発見され、初期金沢城の姿が現況と大きく異なっていたことが明らかになりました。金沢市武蔵町地内の西外惣構跡では、発掘調査により規模、構造、変遷の一端が明らかにされ、金沢大学が調査した宝町遺跡では、かつての「経王寺」と「如来寺」の境を区画する溝などが確認されました。また、小松市の大川遺跡は、位置的にはかつての小松城下町の北端にあたり、城下を区切る堀跡や短冊形に区画された町屋跡が検出されました。町屋跡は洪水等により何度も作り替えられており、古くは利常時代の17世紀中頃に遡ることが確認されました。

以上、簡単に、平成17年度に県埋蔵文化財センター、金沢城研究調査委室および市町村教委、金沢大学で実施いたしました主な発掘調査の概要を紹介させていただきました。今年はマスコミ等で大きく取り上げられるようなことは、あまりございませんでしたが、中近世の城下町遺跡を中心とした一連の調査の成果など、例年にもまして多くの新見地を得ることができたと思います。

第1表 平成17年度県内遺跡発掘調査一覧

No.	遺 跡 名	所 在 地	主な時代					調査 主体	面 積 ㎡
			縄文	弥生	古墳	古代	中世		
1	粟津小学校遺跡	珠洲市三崎町粟津						県セ	1,520
2	飯田町遺跡	珠洲市飯田町						県セ	660
3	渡合遺跡	輪島市三井町渡合						県セ	350
4	河井御蔵跡遺跡	輪島市河井町						市町	1,000
5	飯川谷製鉄遺跡	輪島市門前町飯川谷						県セ	800
6	花園上田遺跡	七尾市花園町						県セ	600
7	下町マツチャマ遺跡	七尾市下町						県セ	420
8	七尾城跡	七尾市古屋敷町・古城町・小池川原町・竹町						県セ	8,490
9	七尾城跡	七尾市古屋敷町						市町	400
10	古府・国分遺跡	七尾市国分町						県セ	8,660
11	国分尼塚遺跡	七尾市国分町						県セ	1,900
12	千野廃寺跡	七尾市千野町						市町	48
13	八幡大皆口遺跡	七尾市八幡町						市町	3,200
14	栄町遺跡	七尾市栄町						県セ	3,800
15	東三階 A 遺跡	七尾市東三階町						県セ	1,400
16	米浜遺跡	志賀町米浜						県セ	900
17	大槻ブンゾ遺跡	中能登町大槻						県セ	1,120
18	大槻ヤマソ遺跡	中能登町大槻						県セ	120
19	大槻キツチャマエダ遺跡	中能登町大槻						県セ	118
20	春木マエダ遺跡	中能登町春木						県セ	142
21	良川北遺跡	中能登町良川						県セ	400
22	太田 B 遺跡	羽咋市太田町						県セ	1,560
23	杉野屋専光寺遺跡	宝達志水町杉野屋						県セ	190
24	中川 A 遺跡	羽咋市中川町						県セ	570
25	太田ニシカワダ遺跡	羽咋市太田町						県セ	210
26	太田ツツミダ遺跡	羽咋市太田町						県セ	570
27	的場農業倉庫前遺跡	羽咋市の場町						県セ	200
28	寺家遺跡	羽咋市寺家・柳田町						市町	300

No.	遺 跡 名	所 在 地	主な時代					調査 主体	面 積 ㎡
			縄文	弥生	古墳	古代	中世		
29	瀬戸町遺跡	かほく市瀬戸町						県セ	520
30	鉢伏カクチ遺跡	かほく市鉢伏						県セ	600
31	森ガッコウ遺跡	かほく市森						県セ	1,650
32	加茂遺跡	津幡町加茂						県セ	4,790
33	加茂遺跡	津幡町加茂						県セ	300
34	加茂廃寺遺跡	津幡町加茂						市町	480
35	北中条遺跡	津幡町北中条						市町	1,500
36	金沢城跡(本丸・本丸附段)	金沢市丸の内						県	1,700
37	”(玉泉院丸南西石垣)	金沢市丸の内						県	100
38	別所戸室権現下丁場跡	金沢市戸室別所						県	9,000
39	俵ニカヤマノヤマ丁場跡	金沢市俵町						県セ	400
40	金沢大学宝町遺跡	金沢市宝町1番1号						金大	3,767
41	伝元本興寺跡	金沢市薬師町						市町	20
42	下堤・青草町遺跡	金沢市下堤・青草町						市町	385
43	西外惣構跡	金沢市武蔵町						市町	100
44	兼六元町遺跡	金沢市兼六元町						市町	168
45	北町北遺跡	金沢市北町						市町	90
46	畝田B遺跡	金沢市畝田中						市町	130
47	無量寺C遺跡	金沢市無量寺町						市町	5,940
48	無量寺D遺跡	金沢市無量寺町						市町	3,460
49	出雲じいさまだ遺跡	金沢市戸板第2土地区画整理事業地						市町	1,129
50	薬師堂遺跡		市町	780					
51	桜田・示野遺跡		市町	630					
52	下福増遺跡	金沢市福増町						県セ	2,600
53	末松遺跡	野々市町末松						県セ	1,200
54	三日市A遺跡	野々市町三日市町						市町	8,910
55	徳用クヤダ遺跡	野々市町徳用町						市町	2,800
56	郷クボタ遺跡	野々市町郷町、徳用町						市町	4,000
57	粟田遺跡	野々市町粟田						市町	4,750
58	富樫館跡	野々市町扇が丘						市町	2,700
59	横江荘遺跡	白山市横江町						市町	97
60	横江荘遺跡	白山市横江町						市町	110
61	相木ナカニシ遺跡	白山市相木町						市町	4,300
62	白江梯川遺跡	小松市白江町						県セ	2,600
63	大川遺跡	小松市大川町						県セ	3,000
64	二ツ梨グミノキバラ遺跡	小松市二ツ梨町						県セ	1,300
65	矢田野遺跡	小松市矢田野町						市町	594
66	薬師遺跡	小松市矢崎町						市町	144
67	小野遺跡	小松市河田町						市町	395
68	刀何理遺跡	小松市矢田町						市町	1,900
69	二ツ梨豆岡向山窯跡	小松市二ツ梨町						市町	277
70	九谷A遺跡	加賀市山中温泉九谷町						市町	30

史跡整備関連

71	時国遺跡	輪島市町野町西時国						市町	50
72	真脇遺跡	能登町真脇						市町	130
73	石動山	中能登町石動山						市町	400
74	鳥越城跡附二曲城跡	白山市上野町・三坂町・出合町・別宮町・釜清水町						市町	350
75	秋常山古墳群	能美市秋常町						市町	200

調査担当 県セ：当埋蔵文化財センター 市町：市町教育委員会
 県：県教育委員会 金大：金沢大学



平成17年度発掘調査位置

粟津小学校遺跡

所在地 珠洲市三崎町粟津地内
調査面積 1,520㎡

調査期間 平成17年10月17日～平成18年1月20日
調査担当 白田義彦 永下賢太



遺跡位置図 (S = 1 / 25,000)

粟津小学校遺跡は海に近い丘陵裾部に立地する。粟津小学校の校名は小学校合併により、現在の校名は三崎小学校になる。近くには須須神社があり、小学校背後の丘陵裾部には須須神社の墓域が存在する。当初は縄文時代の遺跡として知られていたが、1991年の小学校のグランド改良工事に先立つ発掘調査により、中世の遺構が検出され、中世集落の存在が確認された。12～16世紀にわたる遺物が出土し、最も多い遺物は12～13世紀代のものようである。

今回の調査では縄文時代・古墳時代・中世の遺物が出土し、なかでも中世の遺物が最も多く出土した。縄文時代の土器片・石斧は出土した

が、該期の遺構は認められなかった。古墳時代の土器は比較的多く出土し、該期の遺構は土坑が主である。中世の遺物は中世土師器、珠洲焼、陶磁器、などであり、12～13世紀代の中世土師器が多く出土した。遺構も中世のものが多く、掘立柱建物、井戸、区画溝、墓跡などを検出した。

A区の平地では総柱建物(3×4間クラス)・側柱建物(2×3間クラス)の掘立柱建物を検出し、井戸を2基検出した。そのうちの一つは切石積井戸で、珪藻土を井戸枠として利用し、水溜に珠洲焼の甕を埋めていた。

B区の台地上では長方形を呈する中世墓(約1.8×1m)とその北側の掘り込んだ平坦面で柵列と柱穴を検出した。中世墓の覆土から12～13世紀代の中世土師器が出土したが、副葬品は認められなかった。

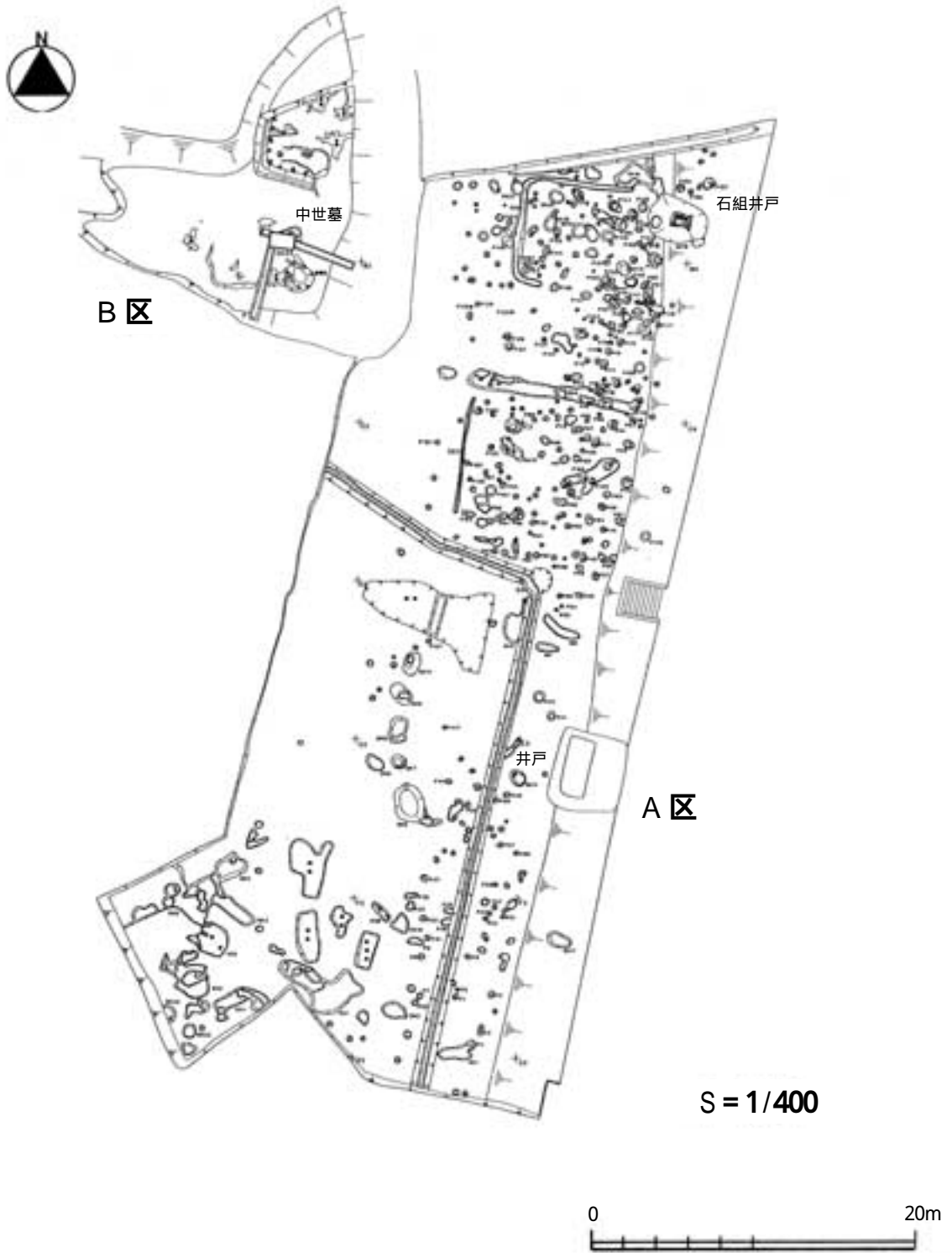
(白田義彦)



B区 完掘状況



石組井戸完掘状況



栗津小学校遺跡 遺構図

飯田町遺跡

所在地 珠洲市飯田町地内
調査面積 660㎡

調査期間 平成17年9月2日～同年11月11日
調査担当 西田昌弘、松尾 実



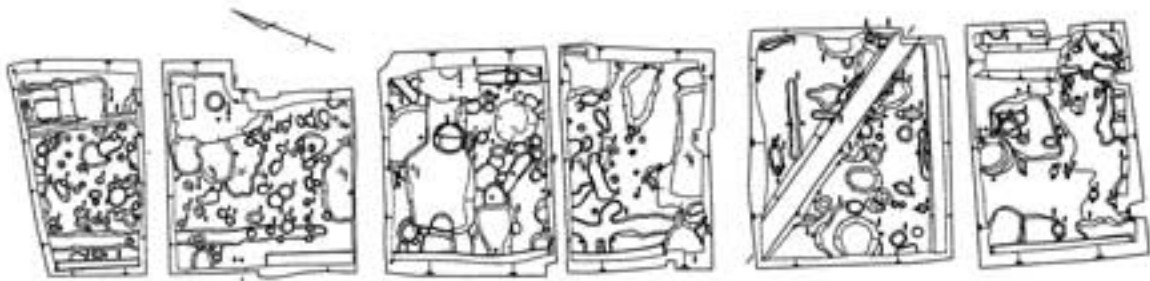
遺跡位置図 (S = 1 / 25,000)

飯田町遺跡は東に若山川、北に城山・春日山の丘陵を望む平野上に立地する。

調査原因は昨年度同様、都市ルネッサンス石川・都心軸整備事業であり、本遺跡としては3度目の発掘調査となる。

昨年度調査区では、掘立柱建物跡や杭列、井戸跡、区画溝などを確認しており、中世から近世にかかる区割りの様相について窺い知ることができた。一方、今年度調査区においては、建物跡は未検出ながら、井戸跡や建物ないし畑に伴う区画溝などを確認した。区画溝は昨年同様、調査区西の現道とほぼ並行して走っており、当時の区割りが今もこの地に刻まれている

ことを窺わせる。また、調査区の過半を占める近世遺構の中には、造成や耕作痕が確認でき、中世以降、特に近世において町場として発展を遂げてきた飯田町の一画において、居住域や耕作地として改変を受けながら現在に至った、土地利用の変遷を窺い知ることができた。 (西田昌弘)



遺構図 (S = 1 / 300)



調査区と現在の町割り (北西から)



区画溝完掘状況 (西から)

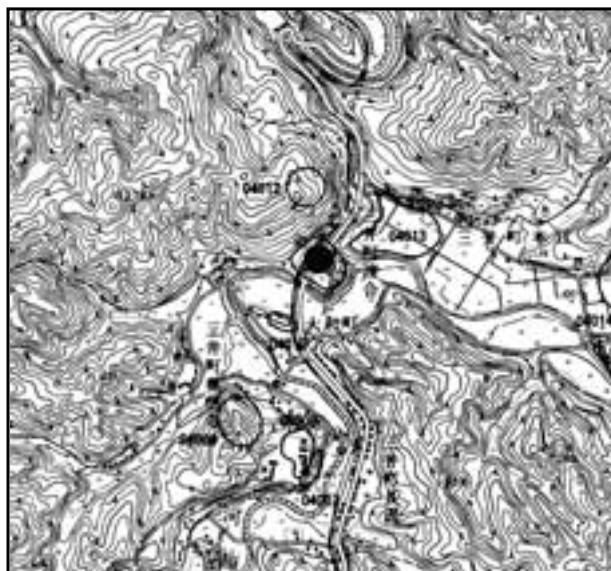
どあい 渡合 遺跡

所在地 輪島市三井町渡合地内

調査面積 350㎡

調査期間 平成17年10月13日～同年11月16日

調査担当 布尾和史 荒木麻理子



遺跡位置図 (S = 1 / 25,000)

渡合遺跡は河原田川左岸の舌状台地上に立地する遺跡で、輪島道路いしかわ広域交流幹線道路整備事業を原因として調査が行われた。なお、1991年にも調査が行われており、縄文時代中期から中世の集落跡であると報告されている。今年度の調査区内では3箇所の鞍部を確認しており、起伏のある地形となっている。各鞍部の間にピットや土坑などの遺構を確認したが、その密度は薄く、出土遺物も僅少であったため、詳細は明らかでない。

(荒木麻理子)



遺跡遠景 (南から)



北部完掘状況

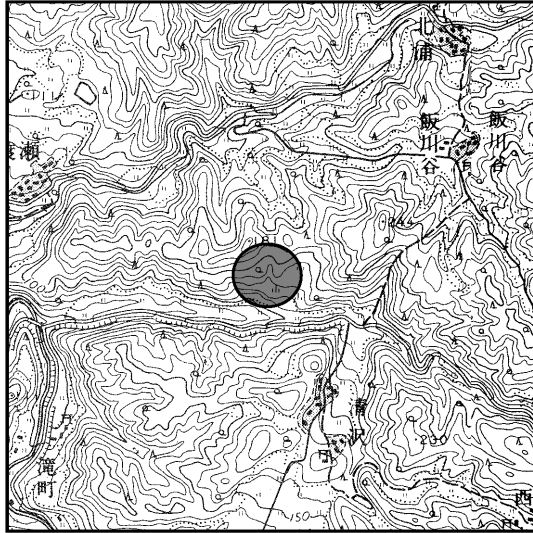


南部完掘状況

飯川谷製鉄遺跡

所在地 輪島市門前町飯川谷地内
調査面積 800㎡

調査期間 平成17年7月1日～同年9月30日
調査担当 白田義彦 谷内明央



遺跡位置図 (S = 1 / 25,000)

調査成果の要点

- ・本調査は広域営農団地農道整備能登外浦3期地区に係る発掘調査である。
- ・本遺跡は仁岸川の支流である北浦川上流の山間部に位置し、谷筋に挟まれた斜面と平坦面に立地する。
- ・製鉄炉跡、排滓場、炭窯跡、掘立柱建物跡、池跡等を検出した。
- ・土師器、珠洲焼、瀬戸焼、白磁が出土し、時期は12世紀代と14世紀後半～15世紀前半である。
- ・炉壁が17.5t、鉄滓は46.7t出土した。

昨年度に引き続き調査を実施し、製鉄炉跡を1基検出した。今回は昨年度で得られた成果も合わせて報告したい。なお調査後に現地で12月まで炉壁・鉄滓の洗浄・荒分類も実施している。

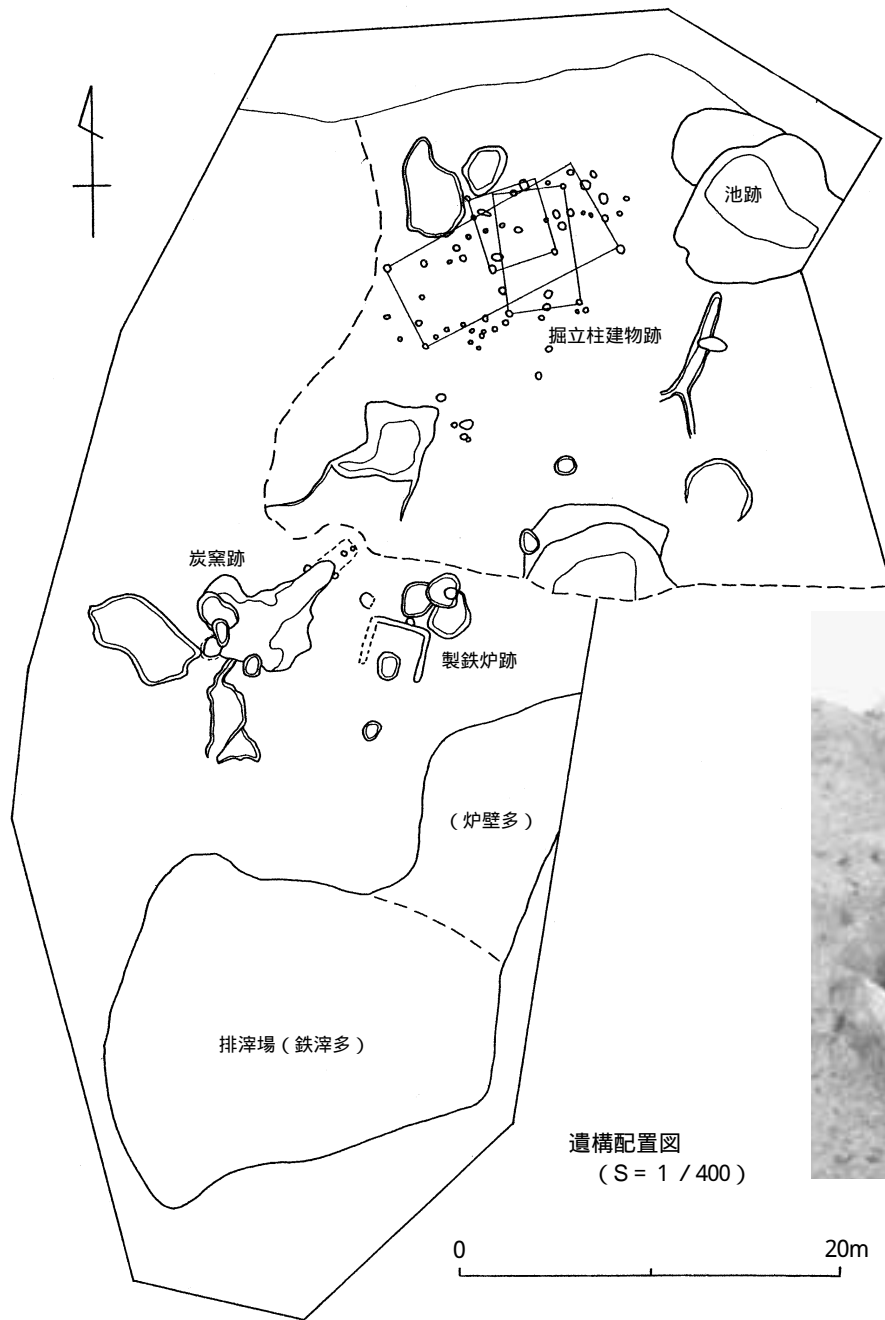
製鉄炉跡 竪型炉と考えられる地下構造の一部と炉を「コ」の字状に囲む排水溝を検出した。炉の地下構造は平面隅丸長方形を呈し、長辺1m・短辺0.7mを測る。排水溝は幅0.3m・深さ0.4mを測り、鉄滓2点と炉壁2点が出土している。排滓場は炉跡南方の斜面、25m×20mの範囲に広がっていた。製鉄に伴う炉壁・鉄滓が厚く堆積（厚さ1.5mに及ぶ地点もある）しており、12世紀代の土師器2点と14世紀後半～15世紀前半の珠洲焼4点と白磁1点が出土している。

炭窯跡 斜面に作られた地下式の窯で、焚口から奥壁までの長さ4.2mを測る。幅は奥壁で0.9m、中央で1.3mを測り、焚口では0.7mと狭められている。奥壁と側面の4箇所煙道が設けられ、奥壁側に掘り抜ける形で改築が行われている。奥壁の煙道には製鉄炉の炉壁が転用されていた。窯床面の側壁際に掘り込まれた排水溝には、鉄滓や石を並べて蓋としている。

掘立柱建物跡・池跡 南北29m・東西24mの略方形に造成された平坦面（面積約700㎡）で掘立柱建物跡3棟と池跡を検出した。掘立柱建物跡の規模はそれぞれ2間×5間、2間×3間、2間×2間で、柱穴から15世紀前半の珠洲焼が出土している。池跡は平面楕円形を呈し、長径9m・短径7m・深さ1.4mを測るもので、周縁に長さ40～50cm程度の石を並べ護岸としている。池の周辺からは14世紀後半～15世紀前半の珠洲焼と瀬戸焼が出土している。

まとめ 遺跡から一望できる高爪山の周辺には製鉄遺跡が数多く（約140箇所）確認されているが、年代や形態については不明な点が多い。本遺跡の発掘成果はその実態を解明するうえで新たな知見を得るものである。炉背に「コ」の字状の排水溝を構築する形状の製鉄炉として、新潟県の北沢遺跡や秋田県の堂の下遺跡の例がある。堂の下遺跡では羽口と炉を一体化させて製鉄炉を構築した可能性が指摘されており、飯川谷でも似た形状の羽口が出土している。炭窯跡は中世以降に多いタイプである。また、伴出した土器などから掘立柱建物跡と池跡の時期は14世紀後半～15世紀前半であった。製鉄炉跡、炭窯跡及び建物跡などの相互関係については時期差の問題も含め、今後の調査で検討していきたい。

（谷内明央）



炭窯跡 (南から)



製鉄炉跡 (北から)



排滓場掘削状況 (南から)

ひがし み かい
東 三 階 A 遺 跡

所在地 七尾市東三階町地内

調査面積 1,400㎡

調査期間 平成17年7月4日～同年9月30日

調査担当 澤辺利明 永下賢太



遺跡位置図 (S = 1 / 25,000)

調査成果の要点

- ・昨年度に続く第2次調査。第1次では室町時代の掘立柱建物、井戸、区画溝を検出、谷川跡から平安時代の墨書土器、瓦塔が出土。
- ・今次は弥生時代後期以降の貯蔵穴1基、鎌倉時代の井戸2基、溝跡、谷川跡等を検出。
- ・2号井戸内外では箸状木製品が300点以上出土、祭祀行為が行われた可能性がある。
- ・谷川跡からは車輪石未製品を含む弥生時代後期～室町時代の遺物が出土。平安時代までの遺構は調査区域外に主体が推測される。

遺跡は、石動山系から流れ出し七尾西湾に注ぎ込む二宮川の右岸に面した丘陵裾に立地する。二宮川沿いの丘陵地には総数500基を超える鳥屋・高階古墳群が分布することが知られおり、遺跡背後の国造山（標高63m）周辺にも多数の古墳が築かれている。県道七尾鳥屋線改良工事ともなう発掘調査は昨年度に続く第2次調査であり、今次調査区域はより谷奥にあたり標高13～20mを測る。

調査の結果、調査区南端に沿って第1次調査区から続く谷川跡右岸が検出され、肩部で弥生時代後期以降の貯蔵穴1基、右岸に面した平坦面で鎌倉時代の井戸2基、水溜1基、溝2条等が確認された。

直径1m弱、深さ約65cmの貯蔵穴は谷川埋没中途の暗褐色粘質土から掘り込まれ、覆土にトチの実が多量に含まれた。また、壁に接しては、底よりやや浮いた状態で木製組み合わせ鋤刃部が出土した。伴出遺物はないが、調査区出土遺物の時期から弥生時代後期以降に位置付けておきたい。内径約1.2mの隅丸方形をなす1号井戸は、底周りに長さ約80cmの転用角材がくの字に遺存し、縦板を伴った可能性がある。覆土中より漆器椀や、中世土師器が出土している。また、井戸に重複して小ピットが1×2間をなし配置され、覆い屋を伴ったとみられる。2号井戸は検出面で2.3×1.7mの長方形を呈したが、深さ約1.4mの底辺では正方形土坑が2個並列した形状をなし、掘り直しを行ったのであろうか。一角には縦杭や板材が遺存していた。井戸内や井戸から谷川に向かう溝からは、中世土師器や曲物板・不明部材片に混じり、断片を含め300本以上の箸状木製品が出土した。約2.5m離れては曲物側板を用いた水溜め様施設が存在し、井戸周囲で何らかの祭祀行為のあったことが推測される。これらは鎌倉時代に位置付けられ、傾斜地を削平、平坦化したうえで配置したとみているが、周辺に分布する小ピットからは掘立柱建物は復元できておらず、遺構の性格については今後検討を要する。

谷川跡からは、弥生時代後期～室町時代の遺物が多量に出土し、中でも平安時代以前が多くを占める。古墳時代前期とみられる緑色凝灰岩製車輪石未製品の出土は特筆される。調査区域は後には水田化され、大正時代末には一帯に最大約2mの盛土をなし耕地整理を行っている。その過程において古代以前の遺構群のいくらかは削平されたであろうが、平坦面からの遺物出土は極少であり、遺構は貯蔵穴ぐらいである。当該期の遺跡主体は谷左岸部に分布するものと推測される。（澤辺利明）



遺跡遠景（西から）



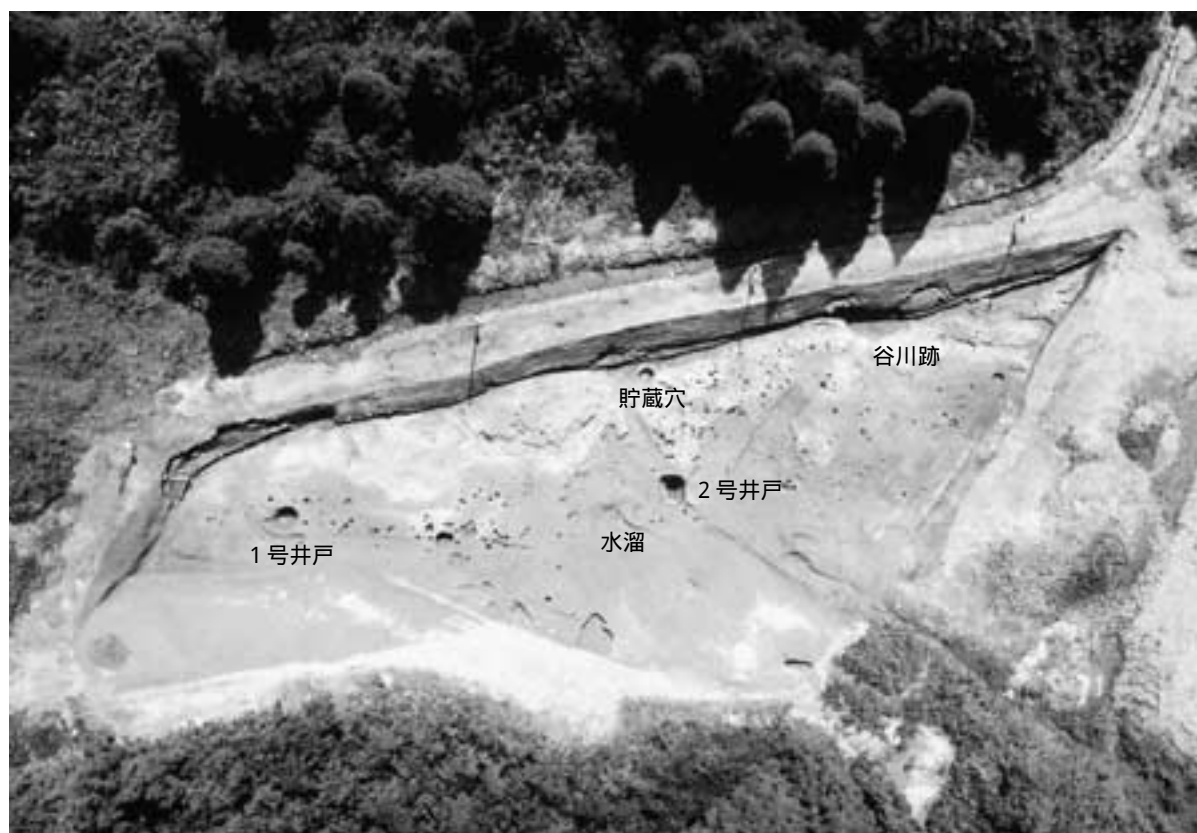
完掘状況（東から）



貯蔵穴内木製鋤出土状況



1号井戸完掘状況



完掘状況（俯瞰）

七尾城跡

所在地 七尾市古屋敷町地内

調査面積 8,490㎡

調査期間 平成17年5月23日～平成18年3月10日

調査担当 中屋克彦 金山哲哉 竹田麻里子 横山 誠



遺跡位置図 (S = 1 / 25,000)

調査成果の要点

- ・戦国時代の土坑、井戸、溝などを数多く検出した。
- ・土師器、陶磁器、土製品、銅銭などのほか、^{ふいじ}鞆の羽口、鉄滓、^{るつぽ}坩堝などの鍛冶や鋳物に関連する遺物が出土した。
- ・調査地は、能登畠山氏の居城であった七尾城の城下町の一部と推測される。

七尾城は、標高約300mの本丸を中心に、尾根筋にいくつもの曲輪が設けられた、戦国時代屈指の難攻不落の山城として知られている。

その城下町については、平成3年に実施された七尾市教育委員会の発掘調査によって、道路や短冊形の屋敷地が並ぶ町並みが確認され、はじめて考古学的にその存在が明らかになった。

発掘調査は、一般国道470号能越自動車道建設に係るもので、古屋敷大池の前から庄津川までの延長約400mにわたり、道路計画路線内を

対象として実施した。この場所は七尾城の総構えのすぐ外側にあたり、今回の調査区は城下町を横断するものである。

調査区の東よりの地区では、作業場の可能性があるものや土を採取した跡と見られる比較的大きめの土坑が多く検出された。また、井戸も多く検出されているが、いずれも石組みや井戸枠のない素掘りであったことが特徴的である。

特に、古屋敷大池の西側付近では、鞆の羽口、鉄滓、坩堝などの鍛冶や鋳物に関連する遺物が数多く出土している。付近は「鍛冶畠」とも呼ばれており、発掘の成果が地名と一致する内容となった。

この他、^{よろい}鎧の一部や刀装具なども出土しており、周辺は城下町の中でも鍛冶、鋳物師を中心とした職人が活動した一画であったと考えられる。また、坩堝の中には金が付着しているものもあり、城下町の一画で、金を扱う職人も存在していたことが推測される。

これに対し調査区の西よりの地区では、建物などの柱穴と見られる小穴や小規模な土坑を中心とした遺構が数多く検出されている。井戸も石組みのものが検出されており、東よりの地区とは様相を異にしている。

また、城下を区画するような、石垣の痕跡が残る溝や、道路と見られる遺構が検出されるなど、町割りを推定する手がかりが得られた。城下の町割りとは各種職人のあり方などから、城下町構造の一端を明らかにできる可能性がある。

(中屋克彦)



調査風景



作業場の可能性がある土坑



素掘りの井戸



土師器の大量廃棄土坑



区画溝



石垣の痕跡がある溝



布掘り建物



石組みの井戸

花園上田遺跡

所在地 七尾市黒崎町地内

調査面積 600㎡



遺跡位置図 (S = 1 / 25,000)

調査期間 平成17年10月13日～同年11月11日

調査担当 澤辺利明 永下賢太

遺跡は、七尾市東部にのびる崎山半島の東側、富山湾に流れ込む熊淵川右岸の丘陵裾に位置し、標高約7.3m、河口からの距離は約500mを測る。

調査地周辺は、遺跡立地の予想される丘陵裾部が現集落と重複しているためか、周知の遺跡は少ないが、熊淵川流域を見下ろす本遺跡背後の丘陵斜面には3基の円墳からなる花園円山古墳群が知られ、山中には珠洲焼の散布も認められている。

調査は、山越えに七尾市藤野町とを結ぶ県道花園藤野線改良工事に伴うものである。

調査区域は過去の区画整理により大幅な削平が加えられており、表土直下で、調査区中央部を中心に、

掘立柱建物の柱穴とみられるピット多数が検出された。建て替えが考慮され検討を要するが3棟はあったようである。また、掘立柱建物周辺からは奈良・平安時代の須恵器、土師器とともに、尖底や平底をなす製塩土器、支脚が出土した。調査区内で製塩に伴うとみられる遺構は検出されなかったが、周辺で製塩作業が行われた可能性が高い。崎山半島沿岸には多数の製塩遺跡が知られているが、調査の結果、空白となっている花園町周辺でも製塩遺跡の存在する可能性が示された。(澤辺利明)



遺跡遠景 (南東から)



作業風景 (北東から)



完掘状況 (南西から)



遺跡から富山湾を望む

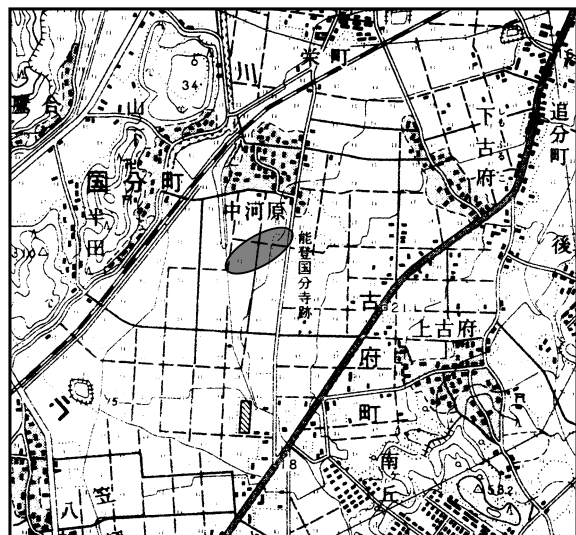
ふるこ 古府・国分遺跡

所在地 七尾市国分地内

調査面積 8,660㎡

調査期間 平成17年4月25日～12年12月22日

調査担当者 岡本恭一 久田正弘 立原秀明 空 良寛



遺跡位置図 (S = 1 / 25,000)

本調査は一般国道159号(七尾バイパス)改築工事に伴う発掘調査であり、国史跡能登国分寺跡の北西側約150m付近に位置する(写真2)。今年度はA～C、F地区があり、全地区で水田による攪乱が多い。

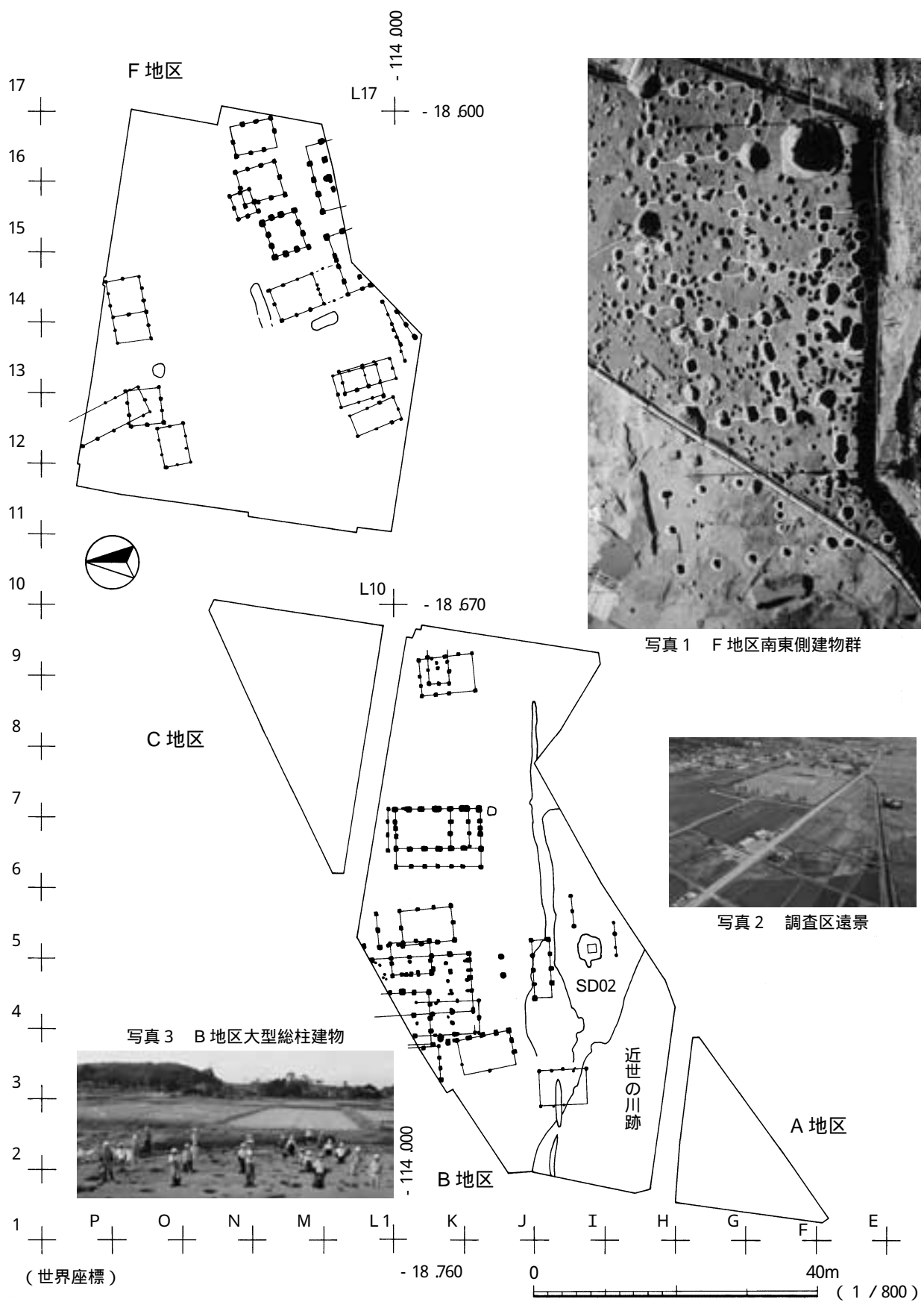
B地区は特に遺構が集中する地区(主要遺構図1)である。東西方向のSD02は9世紀中葉以降の土器が多く出土し、能登国分寺に関連する区画溝と思われたが、幅・深さが一定しないことなどから異なるようである。掘立柱建物群は大きく3ブロックに分かれ、西側ではやや分散しながら、建物群が存在(巻頭図版)する。建物群は南北棟が主体であり、主軸は西へ7～4度振れ、5度が多い。

J3区の側柱建物(西へ13.5度)だけが大きく異なる。14・5区の4×1間の側柱建物は東西棟であり、その北側には2個の柱穴(柱間2.7m)があり、その北側には4×5間の可能性がある総柱建物(写真3)がある。B地区中央付近では6×3間で間仕切りを持つ大型の建物(西へ1.5度)が存在する。西側に庇を持つようであるが、数回の建替えが想定されるので、建替え時の拡張の可能性もある。南東隅にはSE04があり、この建物に付く可能性がある。B地区東側にも4×3間の南北棟建物(西へ6度)があるが、削平の為に付近での建物群の把握が難しい。15区にはSE02があり、時期は9世紀中葉～10世紀中葉である。角柱を転用して井桁に組合せた土台に隅柱を建て、2面に切り込みを入れて横板を落とし込んでいる(写真6・7)。井戸枠の内寸は110cmであり、底には特別な施設はない。掘り方上面には東西に木樋があり、掘り方内で納まっている。古代後半～中世前半と思われる総柱建物群(主要遺構図2)はB地区東側(写真4)では2回建て替えが想定され、中央では4棟の総柱建物があり、西側にも総柱建物が存在すると思われる。B区では畝溝群が区画配置されているようであり、時期は古代末～中世前半と思われる、最終段階の遺構と思われる。

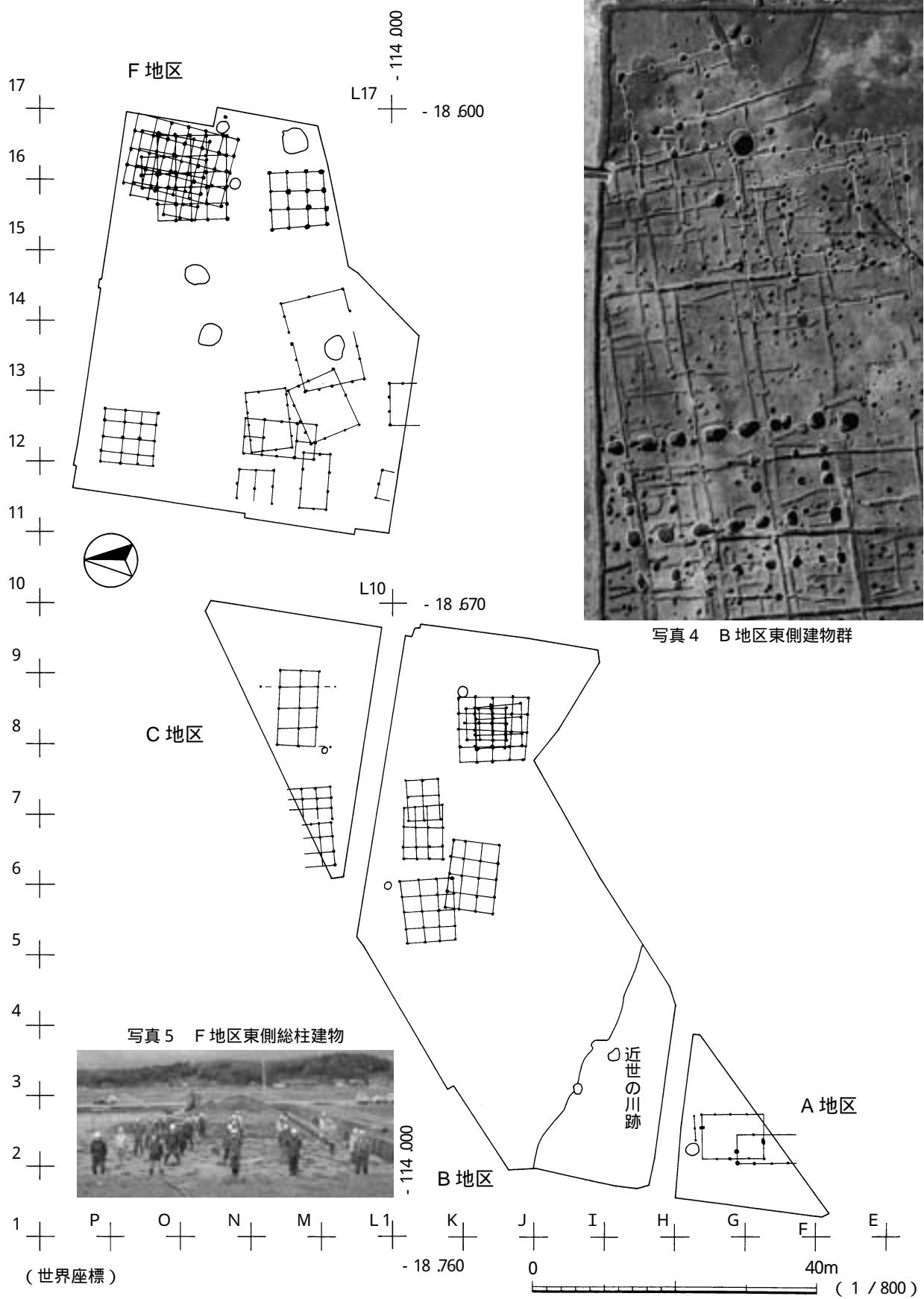
F地区はB地区とは異なる方位の建物群が存在した。北西側の建物は(写真10、西へ28度)で大きく西側に振るが、22～20度(5棟)、18～17度(2棟)、15～14度(2棟)、11度(2棟)、6度(1棟)が確認される。また建物は北西側(写真10)と南東側(写真1)の2箇所に分れており、両グループには15～20mの空間があり、何かの区画が存在した可能性がある。F地区建物は梁行2間の建物で途中に間仕切りを持つ建物(写真8・10)がある。北東側には古代後半以降の総柱建物(写真5、5×4間以上)は2回の建替えが確認され、建物内の北東側では土師器ダマリが存在した。

B・F地区包含層から多量の須恵器・土師器(9世紀中葉～11世紀代)が出土し、他に製塩土器、瓦塔2点(写真11)、灰釉陶器、緑釉陶器、白磁、青磁などが出土した。F地区からは、他に7世紀後半～8世紀前半代の須恵器、平瓦4点、円面硯1点、土馬1点(写真12)、牛馬の歯、石製紡錘車などが出土した。

(久田正弘)



主要遺構図1 (古代)



主要遺構図2 (古代～中世前半)



写真6 B地区 SE02隅柱



写真7 B地区 SE02井戸枠基礎



写真8 F地区南西側建物群



写真9 F地区南東側総柱建物



写真10 F地区北西側建物群



写真11 B・F地区出土瓦塔



写真12 F地区出土土馬

下町マツチャマ遺跡

所在地 七尾市下町地内
調査面積 400㎡

調査期間 平成17年8月22日～平成18年9月15日
調査担当 伊藤雅文 巻久茂



遺跡位置図 (S = 1 / 25,000)

本遺跡は徳田丘陵南端にあたり、縄文時代、奈良・平安時代の遺跡として遺跡地図に記載されている下町樹苗園遺跡につながる遺跡である。調査は歩道建設に伴うもので、狭長な調査区である。掘削前は学校の生垣となっており、樹木埋置に伴う攪乱が予想された。遺跡は丘陵の幅広頂部に位置している。

幅狭い調査区のため目立った遺構は見られず、土坑2基と僅かの柱穴を検出したのみである。隣接地の立会調査で竪穴住居跡を確認し、SK01の土師器甕と同時期とすると、古墳時代中期前葉に属する。(伊藤雅文)



調査区全景 (上空より)



調査区 (北西より)



調査区南半 (南から)



検出土坑



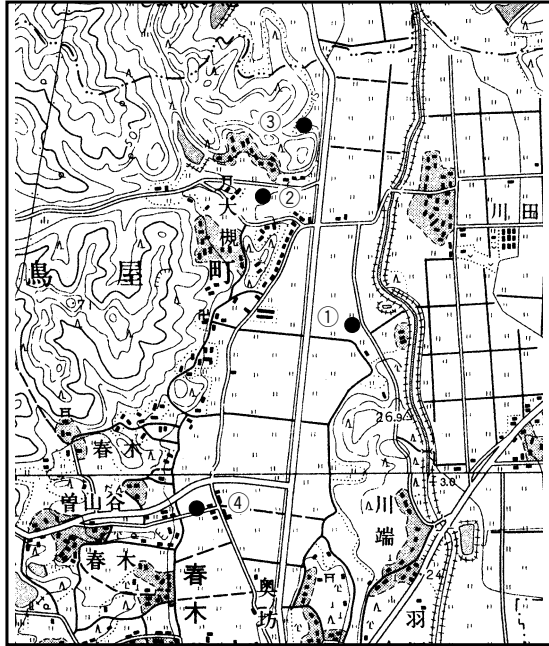
調査区全景 (南から)

おおつき
大槻ブンゾ遺跡・大槻キッチャマエダ遺跡・大槻ヤマゾ遺跡・はるき
春木マエダ遺跡

所在地 鹿島郡中能登町大槻、春木地内
調査面積 1,500㎡

調査期間 平成17年7月28日～平成17年12月21日
調査担当 安中哲徳 森 由佳

(大槻ブンゾ1,120㎡・大槻キッチャマエダ118㎡・大槻ヤマゾ120㎡・春木マエダ142㎡)



遺跡位置図 (S = 1 / 25,000)

調査成果の要点

遺跡は全て中能登町北部の水田中に立地。

大槻ブンゾ遺跡 - 上・下2層にわたり、古代～中世の掘立柱建物や井戸、土坑、溝を多数検出。土師器、須恵器、珠洲焼、製塩土器、石製品、銅銭、鉄滓などの遺物が多く出土。

大槻キッチャマエダ遺跡 - 中世の掘立柱建物、井戸、土坑や鞍部を検出。土師器、須恵器、珠洲焼などの遺物が出土。

大槻ヤマゾ遺跡 - 丘陵裾の溝や鞍部から、弥生時代～古代の弥生土器、土師器、須恵器、石製品、木製品などの遺物がまとめて出土。

春木マエダ遺跡 - 古代～中世の土坑、溝や鞍部を検出。土師器、須恵器、珠洲焼などの遺物が出土。

調査は、県営ほ場整備事業鳥屋西部地区に伴うもので、同地区では平成16年度に行われた試掘調査により新たな遺跡の広がりが確認された。平成17年度はパイプライン・用排水路敷設箇所及び町道付替箇所を対象に、下記4遺跡の調査を行い、弥生時代から中世までの多くの遺構を確認した。

大槻ブンゾ遺跡

遺跡は中能登町北部を流れる二宮川左岸の水田中に位置している。調査の結果、中世(室町時代)及び古代(奈良時代～平安時代)の集落跡を確認し、一部で上・下層の2層に及び調査を行った。

上層には、中世の掘立柱建物や井戸、土坑、溝などの遺構を多数検出した。建物の柱穴の中には、柱根や礎板の残っているものもあったが、遺構の重複も多く建物の復元は今後の課題となっている。



遺跡完掘状況(中央から北へ)



遺跡完掘状況(中央から南へ)



土師器皿出土状況(西から)

井戸は素掘りのものが多いが、底から3段のみ石組みの残る井戸も見られた。包含層や遺構からは、土師器や珠洲焼、陶磁器、製塩土器、石製品、銅銭、鉄滓などの遺物が多量に出土した。鉄滓が多数出土していることから、近くで小鍛冶が行われていた可能性も考えられる。

また、井戸や柱穴などの深く掘られた遺構の調査に伴い、下層に古代の遺構を確認し、掘立柱建物や井戸などから、古代の土師器や須恵器、鉄滓などの遺物が出土した。縦板組みの井戸は、廃棄時に一部の井戸枠を抜き取り、新たに横に素掘りの井戸を掘っていることもわかった。下層の存在は12月の時点で明らかとなったため、協議の結果、一部の調査は次年度に引き続き行うこととなった。



大槻ブンゾ遺跡
石組井戸検出状況（東から）



大槻ブンゾ遺跡
縦板組井戸検出状況（東から）



大槻キッチャマエダ遺跡
遺跡完掘状況（西から）

大槻キッチャマエダ遺跡

中世の掘立柱建物、井戸、土坑などを検出し、土師器、珠洲焼などの遺物が出土した。井戸は全て素掘りのもので、土坑の中には壁面が焼けて赤くなっているものもあった。

また、鞍部からは古代の土師器、須恵器がまとまって出土した。

大槻ヤマゾ遺跡

建物は確認できなかったが、丘陵裾の溝や鞍部から、数次にわたり丘陵上から流れてきたと考えられる弥生時代～古代の弥生土器、土師器、須恵器、石製品、木製品などの遺物がまとまって出土した。古代の須恵器の中には「杉上」や「加比女」などと書かれた墨書土器や転用硯も多数見られた。

春木マエダ遺跡

遺跡の縁辺部にあたると考えられ、建物は確認できなかったが、古代～中世の土坑、溝などを検出した。包含層や遺構からは、土師器、須恵器、珠洲焼、陶磁器などの遺物が出土した。（安中哲徳）



大槻ヤマゾ遺跡
鞍部遺物出土状況（北から）



大槻ヤマゾ遺跡
墨書土器出土状況（西から）



春木マエダ遺跡
遺跡完掘状況（南から）

よねはま 米浜遺跡

所在地 羽咋郡志賀町米浜地内
調査面積 900㎡

調査期間 平成17年10月31日～平成18年1月19日
調査担当 西野秀和 松山和彦



遺跡位置図 (S = 1 / 25,000)

羽咋郡志賀町の中心市街地である高浜地区の東側には、かつて福野潟と呼ばれた潟が広がっていた。江戸時代以降に漸次干拓が進んだが、米浜地区の周辺では昭和40年代頃まで畝田や舟による農作業といった水郷的な風景がみられたという。

さて、米浜遺跡は旧福野潟低地に面した丘陵山麓の帯状の微高地に立地する。製塩土器の出土から推して、古代には福野潟は海水が流入する入り江であった可能性が高い。今回の発掘調査は県営ふるさと農道整備事業（米浜地区）に起因するもので、低地に接する西区とそこから70m程谷に入った東区の2地点が対象となった。西区では微

高地の斜面に堆積した古代の製塩土器層が確認され、尖底・平底タイプのものがまとまって出土した。しかし微高地上はすでに削平されており、炉跡は確認できなかった。また、東区についても古代の溝などが検出されたのみであり、当該期の集落の把握には至らなかった。 (松山和彦)



調査地遠景



西区全景



製塩土器層の掘削



東区全景

良川北遺跡

所在地 鹿島郡中能登町良川地内

調査面積 400㎡



遺跡位置図 (S = 1 / 25,000)

調査期間 平成17年11月11日～同年12月19日

調査担当 西田昌弘、松尾 実

良川北遺跡は邑知地溝帯を流れる長曾川中流域の北側、眉丈山山麓の丘陵裾部に立地する。

主要地方道七尾羽咋線における県単交通安全施設等整備工事に伴う発掘調査であり、昨年度に引き続いて2度目の調査となる。

調査では、上・下2層を確認した。

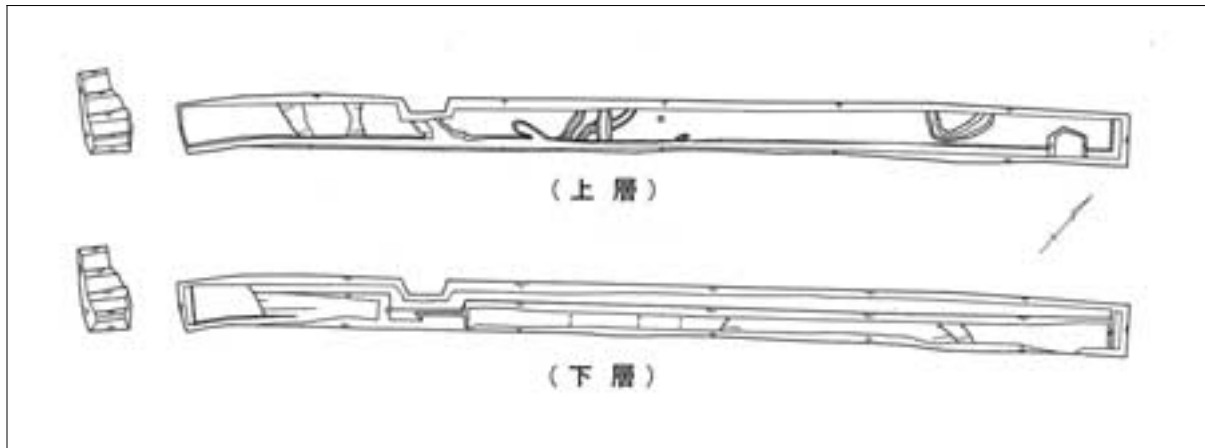
上層では、平安時代の溝・小穴を確認している。

下層では、調査区中央部に谷状地形を確認しており、その旧地形に沿うように古墳時代から平安時代頃にかかる尾根からの土砂流や旧河川の氾濫堆積が確認できた。

遺物の出土は上・下層とも稀薄であり、本調査区

において確認できた旧地形の様相から、現集落が広がる丘陵裾部に当時の集落の中心域が展開しているものと思われる。

(西田昌弘)



上層完掘状況 (南西から)



下層完掘状況 (南西から)

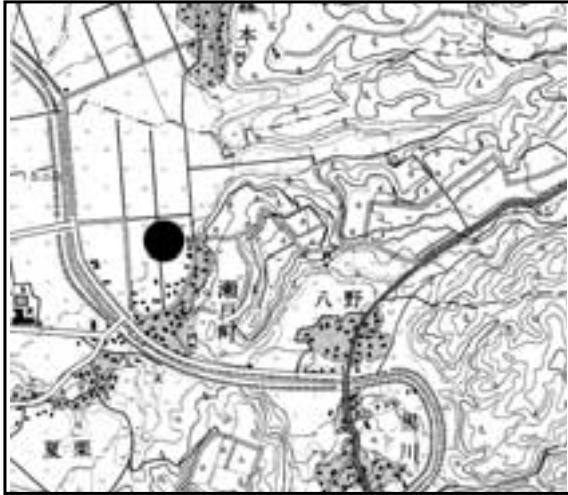
瀬戸町遺跡

所在地 かほく市瀬戸町地内

調査面積 520㎡

調査期間 平成17年9月14日～同年10月24日

調査担当 西野秀和 松山和彦



遺跡位置図 (S = 1 / 25,000)

能登の最高峰、宝達山の南斜面に発した大海川が山間を抜け、海岸砂丘後背の低地に流れ込む地点に瀬戸町地区は位置する。この付近には小規模な扇状地が形成されており、堤防により河道が固定される以前は本流に加えて細い分流も扇状地内を流れていたと推定される。中世以前の集落跡はこのような分流に沿って展開していたようである。

今回の発掘調査は県営ほ場整備事業(瀬戸町地区)に起因するものであり、主に排水路部分等を対象とした、いわば線的な調査である。調査区内では幅約6mの古代の大海川分流跡が検出され、それ以东には古墳時代前期および古代末の遺構が分布する。前者では完形の甕形土器を埋納した土坑が、また、後者では土師器小皿や白磁片を出土した溝が確認されている。一方、分流跡の西側では8・9世紀の遺構が主体であり、掘立柱建物の柱穴などの検出により集落跡の一角と考えられる。加えて中世頃の遺構もみられた。(松山和彦)



発掘調査風景



古代の分流河道跡



古墳時代の土坑



地元児童の見学

はち ぶせ
鉢 伏 カ ク チ 遺 跡

所在地 かほく市鉢伏地内
調査面積 600㎡

調査期間 平成17年11月1日～同年12月27日
調査担当 巻 久茂 和田龍介



遺跡位置図 (S = 1 / 25,000)

鉢伏カクチ遺跡は、弥生時代の高地性集落として著名な鉢伏茶臼山遺跡に南隣する。本調査は急傾斜地崩壊対策工事（鉢伏1号）を調査原因とし、遺跡の損壊する600㎡を対象に発掘調査が行われた。遺跡は鉢伏地区集落背後の低丘陵南端部（標高25m付近）のテラス状平坦面に位置し、鉢伏茶臼山遺跡とは狭い谷筋を挟んで対向する。調査は平坦面南端の南北約10m・東西約60mの箇所で行われた。

検出された遺構は弥生時代後期の竪穴住居跡2棟、円筒土坑3基、溝1条、ピット等である。大半は弥生時代後期の遺構と考えられ、調査区中央～西半に分布している。竪穴住居跡 SI01は調査区西端に位置し、壁溝を有するが全体の1/3程度の検出に留まっている。覆土より法

仏～月影式期の甕と高杯を出土している。竪穴住居跡の西側、ほぼ崖線に近いところで幅0.8mの南北溝を検出しており、集落を区画する溝である可能性がある。円筒土坑は竪穴住居跡の東側に3基が集中した状態で検出され、最大のもので径1.8m、深さ2.2mの大型のものである。出土土器から、竪穴住居跡とは時期差が認められるようである。調査区東端では、中世の遺物を出土する柱穴を検出し、付近に中世の遺構が展開していることをうかがわせている。 (和田龍介)



竪穴住居跡 SI01



円筒土坑群

か も 加 茂 遺 跡

所在地 河北郡津幡町加茂地内
調査面積 4,790㎡

調査期間 平成17年5月9日～同年11月16日
調査担当 巻 久茂 岩瀬由美 和田龍介
松尾 実 伊藤さやか



遺跡位置図 (1 / 25 ,000)



調査区位置図 (1 / 2 ,500)

加茂遺跡は平成3年度から長期間にわたって津幡北バイパス関連の発掘調査が行われてきたが、本調査は津幡北バイパスの加茂から北へ分岐する、いしかわ広域交流幹線軸道路整備(主)高松津幡線(河北縦断道路)を調査原因とする。調査箇所は現舟橋川の右岸及び左岸に位置し、主要地方道高松津幡線東側の左岸をB1区、右岸をB2区、西側の左岸をA1区として調査を行った。

A1区

本調査区は、北半が旧舟橋川によって形成された谷部にあたり、その南側に遺構面1面を確認した。遺構・遺物は希薄で時期を知り得ないが、B2区からの地形のつながりを考えると、古墳時代の遺構面に相当するものと考えられる。

B1区

本調査区も北半が旧舟橋川によって形成された谷部にあたり、その南側に古代の遺構面1面を確認した。遺構は散漫だが、「茂」墨書土器が遺構検出時に出土している。

B2区

本調査区は古代以降(第1面)、古墳時代後期(第2面)、弥生時代(第3面)の計3面の遺構面を確認した。第1面では南東-北西に流れる河道SD1を境として北側には古代の遺構が、南側には近世以降の遺構が検出された。このSD1は後述する第2面相当の古墳時代後期から近世前半まで規模・流路を微妙に変えつつ存続した河川であるが、近世後半には完全に埋め立てられて道路となったことが確認された。この道路遺構は明治年間の地籍地図との照合から、能登街道と推定される。SD1南側で検出された近世以降の遺構は無数のピット群であるが、規則正しくほぼ南北方向に並んでおり、はざ穴ではないかと推定している。それら南北方向に連なるピット群は道路部分で止まっており、河跡或いは道路が境界として意識されていたことが推定される。なお、このピット群周辺では牛の足跡かと思われる蹄の跡が検出されており、田んぼとして利用されていたことが裏付けられよう。

SD1北側では古代の掘立柱建物跡が3棟検出された。いずれも調査区外へ続くため規模は明らか

ではないが、1棟は最大で桁行4間まで確認している。その柱穴上面からは土師器埋納遺構が検出された。中央に1枚土師器椀を倒置し、その周囲に2、3枚重ねにした土師器椀を約6セット正置した遺構である。柱穴上面の検出であることから、建物の廃棄儀礼に関わる祭祀跡とみられる。他に、性格は不明ながらも径2.2~2.8m程度の浅い楕円形土坑を2基検出した。SD1からは大量の遺物が出土しており、土器の他に木簡、帯金具、刀子、鉄製工具、刷毛、フイゴ羽口、鉄滓など役人や職人の所在を示唆する遺物が出土している。木簡は「[]家郷 品治部 良英太若岡麿 『麿』」と判読できる。数は多くはないが墨書土器も出土しており、「賀茂」、「平」、「否万」、「千」、「中」などを確認している。

第2面では溝、ピット、土坑などを検出した。建物の復元には至っていないが、区画溝とみられる遺構があり、柱穴様のピットもみられることから、居住域の一部とみられる。土坑は径4~5mの大型土坑が2基接して検出され、SK1からは一括廃棄された土器が多量に出土した。SD1もこの時期から流れており、古代には及ばないものの、多量の土器が出土している。古代はSD1の北側にしか集落を確認できなかったが、古墳時代後期の段階では河川の両岸に集落が展開していたと判断される。

第3面では溝とピットが確認されたのみで、遺物の出土も少量であることから、集落の縁辺部と推定される。SD1から当該期の遺物が少量ながら出土しており、上流側に弥生時代の集落の存在を想定できよう。

(岩瀬由美)



第1面完掘状況(南から)



第1面SD1遺物出土状況



第1面土師器埋納遺構



第2面SK1遺物出土状況

しも ぶく ます 下 福 増 遺 跡

所在地 金沢市福増町地内

調査面積 2,600㎡

調査期間 平成17年9月5日～同年12月15日

調査担当 岩瀬由美 伊藤さやか



遺跡位置図 (1/25,000)

下福増遺跡は金沢市西部に位置し、手取川扇状地の扇端部付近に立地する。本遺跡は一般国道305号線道路改良工事及び主要地方道松任宇ノ気線緊急地方道路整備工事に伴って調査が実施された。

調査区は南北に長く、中央付近に東西方向の鞍部が存在したため、それより北側を北調査区、鞍部を含む南側を南調査区として調査した。

北調査区では東西南北に規則正しく並ぶ中世の溝群を39条検出した。東西方向に走る溝は幅0.6～1.2m、長さ4～6.5mで南に行くにつれ長くなる傾向が認められ、南北方向に走る溝は幅0.65～1.2m、長さ9.5m前後で後者の方が長い。深さは上面が削平を受けてい

るため1～28cm程度と浅い。いずれも底面には細かい凹凸が観察されることから、何らかの耕作に伴う溝と推定している。本調査区では他に弥生時代前期の土坑や弥生中期の溝を検出している。SD42は南西 - 北東方向に直線的に走るもので人為的な掘削とみられる。一方、それを切って北西 - 南東方向に流れる溝は緩やかに湾曲する浅い溝であり、自然流路の可能性が高い。時期は同じく弥生時代中期である。

南調査区では、北調査区のような中世の溝群の検出はなく、該期の遺構は南端部でピットが1基検出されたのみである。弥生時代の遺構は北調査区から続く自然流路が鞍部で一旦途切れた後、南東部でその続きとみられる溝が検出された。他に該期のピットが数基検出されている。鞍部では不整形な溝状の落ち込みが多く検出されたが、人為的な遺構ではなく、雨水等の流路痕跡であろうと推定された。



北調査区溝群完掘状況 (俯瞰)

遺構は上記のように中世と弥生時代中期の溝を中心として検出されたが、遺物は縄文時代晩期～弥生時代中期の製品が散発的に出土している。建物跡等は確認しておらず、近接する中屋サワ遺跡などで同時期の集落域が確認されていることから、それら集落の縁辺部に位置づけられよう。(岩瀬)



北調査区 SD42完掘状況 (北から)

しら え かけはし がわ
白江梯川遺跡

所在地 小松市白江町地内
調査面積 2,600㎡

調査期間 平成17年8月17日～同年12月9日
調査担当 立原秀明 大路葉子



遺跡位置図 (1/25,000)

白江梯川遺跡は、小松市北部を流れる梯川の中流から下流にさしかかる左岸に位置する。本調査は梯川改修に伴う調査であり、今回で12次を数える。これまでの調査の結果、弥生時代中期から古墳時代後期、平安時代中頃から中世に断続的に営まれた複合集落跡であることが確認されている。今年度の調査でも、弥生時代、古墳時代、中世、近世の遺構・遺物を確認した。

弥生時代から古墳時代にかけての遺構では、1区画約2m×4mの小区画水田を検出した。このような小区画水田は昨年度の調査区でも検出されており、今回の調査でその広がりを確認

することができた。古墳時代の遺構では、河跡を検出した。河跡はほぼ南北方向にのびており、河跡下位からは完形に近い土器が多数出土した。これらの土器は祭祀に使用した後に投棄されたものと考えられる。また弥生時代の遺物では、翡翠の勾玉や銅鏃が出土した。銅鏃は長さ約4cmで残りが非常によく、貴重な発見となった。

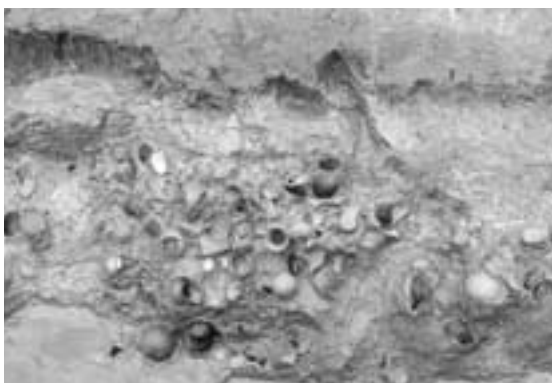
中世では掘立柱建物3棟、井戸3基、溝、近世では溝などの遺構を検出した。中世・近世の溝からは陶磁器類や、下駄をはじめとする木製品も出土した。 (大路葉子)



遺跡遠景 (西から)



水田跡 (西から)



河跡中央の土器群 (東から)



銅鏃出土状況

大川遺跡

所在地 小松市大川町地内
調査面積 3,000㎡

調査期間 平成17年8月15日～同年12月20日
調査担当 布尾和史 宮川勝次 荒木麻理子 山田由布子



遺跡位置図 (1 / 25,000)

調査成果の要点

- ・遺跡は近世小松城下町の一部である。
- ・数時期に及ぶ短冊状の区画を呈する町屋を中心として、堀、石垣等を検出した。
- ・町屋の初現は17世紀中頃に形成されたもので町屋と隣接した同時期の堀(SD1)を確認した。その後、SD1を埋め戻して町屋域は拡張されており、それと同時期あるいは後の堀(SD4)を造ったと推定される。SD4には護岸用と見られる石垣が伴っていた。
- ・遺物は陶磁器を中心に、漆器・下駄・箸等の木製品や石製品等が出土している。

本遺跡は小松市街地の北部、梯川左岸から南へ約10mの地点に位置する。調査は都市計画道路根上小松線・緊急街路整備事業に係って行われた。大川遺跡の発掘調査は、梯川河川改修工時に伴い平成15年度にも行われている(石川県埋蔵文化財情報 第11号)。遺跡は近世城下町の一部であり、町の初現は加賀藩3代藩主前田利常が隠居城として小松城に入城した寛永17(1640)年頃と推定される。本年度調査区は大きく町屋分布域と城下町を区画する堀の確認された地区から成る。

町屋は街道沿いに面し、東西に長い短冊状の区画を呈する。この区画割りは現代の町の姿にも影響が見られる。町屋の屋敷地境には畦や杭列、溝を確認しており、これらが家同士の仕切りの役割を担っていたと考えられる。町屋内では多くの井戸を検出しており、町屋1軒につきおよそ1基の井戸を有していたようである。井戸枠は桶を中心とした木製のものと石製ものが2種類見られるが、検出状況から木製井戸枠の方が古いと見られる。

出土遺物や現存する絵図の検討から、遺構の形成時期は17世紀中頃となる可能性が高い。町屋はその後も継続していたと見られ、同一地点での町屋区画の作り替えが認められる。堀SD1も17世紀中頃と見られ、町屋分布域の東側に隣接して確認できるが、短期間で埋没ないしは埋め戻されて町屋分布域がSD1の上まで拡張されている。町屋分布域が拡張したと同時あるいはその後に、SD1の東側に城下町の範囲を拡張する形で新たに堀SD4が形成されていたようで、SD4には護岸用と見られる石垣が一部確認された。石垣は、長方形を呈する凝灰岩を積んでおり、最大で5段が残存していた。南側は後世の破壊を受けて残存していなかったが、北側の梯川方向に向かって延びていく様子が確認された。

小松城下町の発掘調査はこれまでに類例がなく、今回の発掘調査により、特に城下町形成時期における小松町の姿の一端を復元できることが期待される。なお、平成18年度に当調査区の北側を調査することになっており、梯川左岸における近世小松町北端部の様相がより一層明らかになるであろう。

(山田由布子)



遺物出土状況



堀 SD 1 (南から)



承応元年 加州小松城之図
(加能越文庫 金沢市立玉川図書館蔵 小松市史より転載)



町屋完掘状況 (北東から)

平成17（2005）年度下半期の遺物整理作業

第1班

上半期から継続していた加茂遺跡（津幡町、平成11年度調査）の整理後、和田山堡跡（津幡町、平成16年度調査）、東三階A遺跡（七尾市、平成16年度調査）の整理作業を行った。

加茂遺跡での木製品は、その長さに驚き、東三階A遺跡の柱根では、一人では到底持ち上げることが出来ないほどの大きさと重さに苦労した。東三階A遺跡では、「十」、「八」の墨書土器に加えて、最も多く書かれていたのは、「加得」という吉祥を意味する文字だった。また中世の五輪塔も数多く、古代の瓦塔なども出土していた。下半期は、バリエーションに富んでいたような気がした。



1班 木器の実測

（松田智恵子）

第2班

森本C遺跡（宝達志水町、平成16年度調査）の整理作業終了後、小島西遺跡（七尾市、平成14～16年度調査）の土器185箱もの記名・分類・接合作業を行った。

この小島西遺跡では、5世紀から7世紀にかけての、脚台付きの製塩土器が出土していて、その破片量のおびただしさに、接合がかなり困難を極めた。中には、被熱していない製塩土器もあり、それらは、古代の祭祀に使用されたのではないかとの説明もあった。また能登では出土が珍しい人面墨書土器も見られ、多くの破片の中から、欠損部分を探すのは容易なことではなかった。

多量の遺物の記名・分類・接合作業は、次の実測作業をいかにスムーズに進めることが出来るかを、つねに考え合わせての作業であった。

（黒田和子）



2班 土器の記名・分類



2班 製塩土器の分類

第3班

11月から3月末までは、金沢城跡（金沢市、平成15・16年度調査）の記名・分類、実測・トレース作業を行った。

整理課が行う作業には、成果品として残る実測やトレースとは別に、記名・分類・接合作業など、実測の前段として行う重要な作業がある。その記名作業については、ジェットマーカ―なる記名用機械の出現により、手書きに比べて格段にスピードアップした。しかし、分類・接合作業に関しては、今も作業スタッフの記憶と粘りの作業に変わりはない。金沢城跡の接合は、瓦が主であり、丸瓦と平瓦の形状の違い、燻しと釉薬の有る無しといった表面上の区別の他、手掛かりとなる個々の特徴は、ほとんど見られない。整理課には、神の手とは言わないが、天使の手と眼を持つ人がいる。その人達の根気と努力によって僅かの接点から、一応の形になったものや両年に渡る接合も何点かでき、接合作業の手応えはあったと自負している。（小林直子）



3班 瓦の記名



3班 瓦の分類・接合

第4班

上半期に着手した四柳白山下遺跡第5次調査（羽咋市、平成10年度調査）の実測・トレース作業を行った。

土器は、古代の土師器、須恵器が大部分であったが、その中で印象的だったのは、高さ10cm位の備前焼の擂鉢である。唐津焼、越前焼、越中瀬戸焼などの擂鉢は、いずれも小片でしかなかった。しかし口縁部が約半分欠けているものの、全体の形がわかり、その器高に比べてアンバランスと思える幅広の口縁帯や、回転台から外したままで、凹凸が残る底面など、小体ながらも趣きのある擂鉢であった。また越前焼を真似た土師器の擂鉢は、全く土師器そのもので、卸し目の有りようから擂鉢だと確認でき、実際どの様に機能したのかと不思議に思った。



4班 陶磁器の記名



4班 実測図の整理

この遺跡は、縄文時代から近世初頭にわたり、多様な土器と器種を出土しているが、度重なる土砂災害の為に、遺存度の低さが目立ち、復元に至る土器が少なく残念であった。（新谷由子）

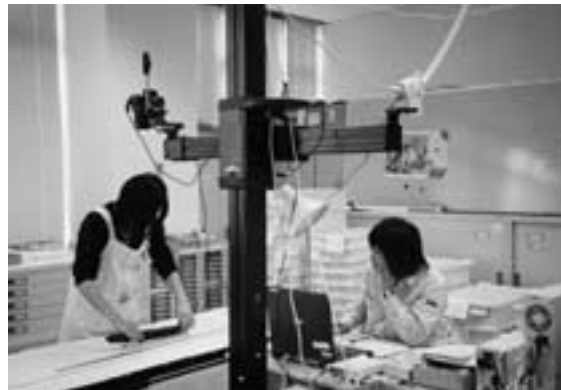
第5班

上半期より継続して小島西遺跡（七尾市、平成14～16年度調査）の木製品の実測・トレース作業、計測やデジタルカメラによるデータ作成などを行った。

昨年度の作業に比べ齋串や人形等の小品が少なく、井戸枠・柱根等の大型木製品が多かったため、作業にはより多くの時間を要した。とくに当遺跡の整理の特徴は、通常の実測作業に加えて、木製品の分類・データ作成を行ってきたことである。そのため、より長く木製品を空気にさらすことになり、木製品を劣化させる可能性が高くなる。創意工夫を積み重ねて木製品の保存を心がけてきたが、改善すべき点は、多く残されていると思われる。（横山そのみ）



5班 木製品の実測



5班 木製品のデータ作成

第6班

上半期から引き続き加茂遺跡（津幡町、平成11年度調査）の整理作業を1月末まで行い、その後は、太田A遺跡他4遺跡（羽咋市、平成16年度調査）すなわち太田A・B・Cの3遺跡と太田ツツミダ、中川A遺跡の計5遺跡の整理作業を行った。

遺物は、若干の墨書土器を含む弥生土器、土師器、須恵器、珠洲焼、銅銭などであった。上半期から整理作業を行っていた加茂遺跡と、ほとんど同じ時期の遺物だった事もあり、記名・分類・接合から実測・トレースまでは、大変スムーズに作業を進める事が出来た。しかし遺構図のトレース作業は、図面の縮尺率を変更したり、図面をつなげたりとその準備段階で苦戦した。（河村裕子）



6班 土器の分類・接合



6班 須恵器の実測

第7班

下半期は、加茂遺跡（津幡町、平成12年度調査）の残りの整理作業と、三木A遺跡（加賀市、昭和61年、平成4・5年度調査）の記名作業を担当した。

加茂遺跡は、上半期に土器実測をほぼ終えており、残りの土器、金属器、石器の実測・トレースの作業となった。加茂遺跡の石器は、弥生時代末の玉未成品である緑色凝灰岩をはじめ、剥片、磨石、石核、砥石、磨製石斧など様々あったが、書く面の数が限られている事から、いかにして全面を表現できるか角度を考えながら、設置し実測をせねばならなかった。中でも石核に関しては、方眼の無いケント紙での作図に、つじつまを合わせながら、剥離面などの細部を実測するのは、容易な事ではなく頭を悩ませたが、その都度班員で話し合い、なんとか期限内に終わることができた。その後は、約一ヶ月間、ひたすら三木A遺跡（87箱）の記名作業を行い、下半期の業務を完了した。

（芝山美知代）



7班 実測図のトレース

第8班

上半期に引き続き、加茂遺跡（津幡町・平成13年度調査）の土器、木器、石器、金属器の実測とトレースを行った。

加茂遺跡の木製品は、残存の状態が悪く、原形を留めた遺物が少ない中で、機織り具の刀杼は、かなり印象的だった。緻密に並んだ経糸痕が、現代の定規を連想させ、いつにも増しての細かい作業に刮目して臨んだ。実測中には、「木工と木製遺物の実測」の勉強会もあり、その内容を踏まえ、今までとは少し違った視点からの実測を鑑みることができた。通例どおりに行かなかったのは墨書土器の実測で、筆運をたどり、辞書を開き、判読不明瞭の文字と睨めっこする日が続いたことである。

（本保早苗）



8班 木製品の実測

復元班

下半期の復元作業は、加茂遺跡や四柳白山下遺跡など、年間を通しての作業の他、東三階A遺跡のように短期間で仕上げないといけない遺跡など、さまざまな遺跡の作業をしてきました。特に後半では、土師器の皿、椀、須恵器の壺などの小物が多かったように思います。

整理課には8班のグループがあり、各遺跡から選別された遺物が復元班に運ばれてきます。各班の様子を見ながら作業を進めるのは、大変な事です。復



復元班 須恵器の復元

元作業は甕、壺、小型の坏、皿など形もさまざまであり、これからも石こう入れ復元、補強に精進したいと思います。
(前田すみ子)

洗浄班

下半期は、栄町遺跡他1遺跡をはじめ、飯田町遺跡、大川遺跡など、全部で23遺跡の洗浄・乾燥作業を行った。大川遺跡では、近世の茶碗が多く、青・赤・緑色で描かれた文様がきれいで、キセルが珍しかった。東三階A遺跡では、中世のお銭が沢山あった。また太田ニシカワダ遺跡の墨書土器、加茂遺跡の木器洗浄などが大変で、大槻ヤマゾ遺跡と大槻ブンゾ遺跡では、墨書土器や種実に注意し、動物骨の存在にびっくりした。今回も色々な遺跡にかかわることができ勉強になった。
(上尾春代)



洗浄班 木製品の洗浄

データ作成作業

第5班が平成17年度に実施した小島西遺跡のデータ作成は、同遺跡から大量に出土した木製遺物の整理作業の一つで、遺物の計測とデジタル画像の撮影を実施した。

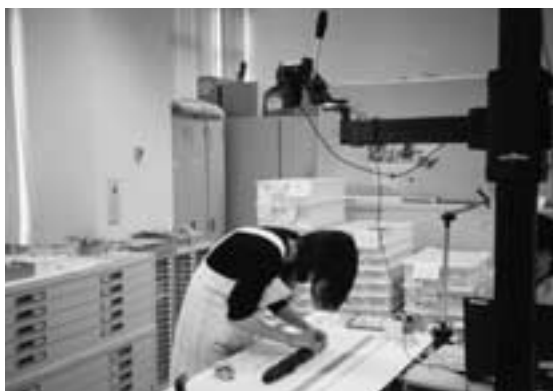
作業の点順は、木製品の計測や実測、デジタルカメラによる両面撮影、画像と計測データの整理で、5名の班員が分担することで作業の進捗を高めた。



木製品の实測と計測



デジタルカメラ撮影の作業状況



木製品の両面撮影



画像データ等の整理

金沢市畝田西および畝田東遺跡群出土木簡の保存処理

中山 由美

1 はじめに

遺跡から出土する木製品の中でも木簡は特に取扱いに注意が必要な遺物である。本稿では木簡の取扱い方法と金沢市畝田遺跡群より出土した19点の木簡に施した保存処理について紹介する。

2 木簡の取扱い

遺跡から木簡が出土した場合、すぐに直射日光を避け乾燥しないようにしなければならない。乾燥を防ぐことは出土木製品を取り扱う際は非常に重要なことであるが、特に墨書は紫外線によって退色してしまうため注意が必要である。また、木簡に残る墨は劣化した木材の表面に極めてわずかにしか残っていないため、洗浄するときは墨を流してしまわないように、慎重に作業を行う。このような木簡を保管する時には、ガーゼや不織布などの保護材を使用すると木簡の表面に擦れて痛んでしまうため、使用を控えるべきである。他に頻繁な水替えでも墨が流れてしまうため、防腐剤をいれた水に浸し、低温収蔵庫などで保管することが理想的である。

資料の埋蔵環境によっては保管中に表面が黒ずみ、墨書が判読しづらくなることがある。このような場合は木簡を脱色することで再び色調を戻すことができることが多い。ほとんどの場合、黒ずみの原因は金属イオンであるが、これは薬剤によって除去することができる。本遺跡の資料については低温収蔵庫での保管中に木簡表面に鉄分が析出したものが1点あった。薬剤によって表面上は取り除く



畝田・寺中遺跡出土木簡（保存処理後）

事ができたが、特に鉄分の多い土中から出土した木簡は予め金属イオンを取り除いてから保管したほうが良いようである。ただし、使用した薬剤が木簡に残留することが無いよう、十分に気をつけて取り扱う必要があることは注意しなければならない。今回の木簡の中では出土直後は良好な状態であった出拳木簡（畝田・寺中遺跡第1号木簡）が、その後の保管や長期の展示によって文字部分が劣化していたことが、処理を行ったことで明らかになった。このように保管の時間をできるだけ短くして保存処理を行ったほうが処理後の仕上がりは良くなるため、木簡が出土した場合は早急に実測や写真などの記録をとり、いち早く保存処理を行う必要がある。

3 木簡の調査

木簡などに残る墨痕を調べる場合には、赤外線が有効である。赤外線は顔料や墨にはよく吸収されるため黒く写り、木や染料などには吸収されずに反射するため白く写る。また、赤外線は可視光線より物質の中にやや深くまで入って反射する性質があるので、木簡などで肉眼では墨書が確認できない場合でも木材の内部に墨が残っていれば内部の墨を画像として写すことができる。今回保存処理した資料も当センター所有の赤外線テレビシステムで墨痕の観察を行った。



墨書部分（40倍）

4 保存処理

当センターでは従来木簡の保存処理には真空凍結乾燥を行っている。遺跡より出土した木材は土中で徐々に腐朽しており、現生の木材と比較すると、その強度は著しく低下し内部に水を含む率が非常に高い。そのため自然に乾燥させると木材が収縮し変形が生じる。このような変形をできる限り回避して出土木材を乾燥させる方法の一つに真空凍結乾燥法がある。

真空凍結乾燥法は対象となる資料に含まれる水分を真空状態で凍結させ、その凍結した個体の状態のまま水分を蒸発（昇華）させる方法で、一般的にはフリーズドライ法などと呼ばれ、食品や医薬品の加工に多く用いられている。真空凍結乾燥法で処理を行った木材は他の方法で処理した木材よりも重量が軽く表面の色調が明るくなるのが特徴であるが、今回は特に墨書を見やすくし、乾燥効率を向上させるため木簡の中の水分を予め第3ブチルアルコールと置き換える方法をとった。木材内部の水分を完全に



真空凍結乾燥機

アルコールに置き換えた後、本体を強化するためポリエチレングリコールを20%しみこませている。その後の凍結乾燥の時には墨書のない同様の材質、大きさの木材にひずみ計を取付け、乾燥中の木材の収縮を常時計測しながら処理を行った。一部の劣化の激しい資料については、部分的に2～3%収縮してしまいましたが、ほとんどは良好な仕上がりになった。しかし表面に鉄分が付着していた木簡は鉄分を除去した後の痕跡が残ったので木簡の保管にはより注意が必要であることが分かった。

保存処理後の木簡は明るい色調になり、また、事前の赤外線による撮影では発見できなかった墨書部分が肉眼で確認できるようになった。保存処理後の赤外線観察により、木簡釈文の訂正を行ったものも少なくない。これが赤外線撮影時の見落としによるものか、あるいは保存処理の影響によるものであるかの判断は今後の課題としたい。



保存処理後



畝田・寺中遺跡出土木簡（処理前）

5 展示と保管

保存処理が終わった木簡は、当センターでは温湿度の管理された特別収蔵庫で保管されている。今回のように真空凍結乾燥を行った木製品は他の処理方法に比べて温湿度の許容範囲が大きいですが、それでも高温、高湿度の場所に長時間置かれると木簡内部の薬剤が溶け出して表面の色を暗くする。そのため保管は温度 20 ± 5 、湿度 $40 \sim 50$ の場所が望ましい。また、木簡を展示する場合も同様の環境でなければならない。

特に展示で注意しなければならないのは、紫外線は墨書を退色させるので紫外線にさらさないことである。これは木簡に限ったことではなく墨書土器も同じであるため、墨が付着した資料は長期間展示しないほうがよい。

今回、平成16年から17年にかけて約1年半の間に19点の木簡の保存処理を行ったが、当センターでもこれだけまとまった数の木簡を処理した例は初めてであり、いろいろと新しい知見を得ることができた。今後はこの経験を他の木製品の保存処理にも生かしたいと思う。

石川県埋蔵文化財情報

第16号

発行日 2006(平成18)年9月29日

発行 財団法人 石川県埋蔵文化財センター

〒920 1336 石川県金沢市中戸町18番地1
TEL 076 229 4477 FAX 076 229 3731

URL <http://www.ishikawa-maibun.or.jp/>
E-mail address mail@ishikawa-maibun.or.jp

印刷 株式会社 橋本礎文堂

© (財)石川県埋蔵文化財センター